

鹿児島大学 地域にイノベーションを創出する 「知の拠点」へ向けて



鹿児島大学長
まえだ よしざね
前田 芳實

地域貢献マインドを持ちグローバルに活躍する
人材を輩出する地方大学の使命

国立大学の法人化から12年を迎えた今年6月、来年度から実施される第3期中期目標・計画の素案が作成されました。この機に、本学に対する社会からの理解を一段と増進するため、鹿児島大学前田芳實学長と鹿児島大学の経営協議会外部委員であり、鹿児島の経済界を牽引する城山観光株式会社取締役会長の伊牟田均氏との対談が行われました。

**自主自立と進取の精神を尊重し、
地域の発展に貢献する総合大学へ**

中島 まず本学の理念と基本目標について前田学長よりお願いします。

前田 鹿児島大学は「自主自立と進取の精神を尊重し、社会の発展に貢献する総合大学をめざす」ことを謳った「大学憲章」を平成19年に制定しました。これは本学の羅針盤とも言える行動指針で、とくに教育においては「高い倫理性と社会性を備え、向上心を持って自ら困難に立ち向かい、国際社会で活躍できる人材の育成」を掲げています。

「進取の精神」を学生教育に具現化すべく、本学学生の行動指針や規範となる「鹿児島大学学生憲章」を平成22年に制定しました。この学生憲章は、全学部から推薦された学生が参加する「学生憲章ワークショップ」や「学生憲章作成委員会」が草案の作成や検討に当たると、学生自らの手で策定した全国の国立大学では初めての憲章です。鹿児島大学は、進取の精神を有する学生を育成して、地域とともに発展する知の拠点として、「進取の気風にあふれる総合大学」を目指しているところです。

中島 そうした本学の理念や基本目標を踏まえた上で、今年6月に第3



鹿児島大学経営協議会外部委員
城山観光株式会社取締役会長

伊牟田 均

中期中期目標・計画の素案が策定されたわけですが、この中期目標期間に当たる平成28年度から平成33年度までの6年間における本学のあり方や目標についてお話しいただけますか。

前田 大きく4つの柱を立てています。地域活性化の中核拠点として、「グローバルな視点を有する地域人材育成の強化」、「本学の強みと特色を活かした学術研究の推進」、「地域ニーズに応じた社会人教育や地域連携の推進」、「機能強化に向けた教育研究組織体制の整備」です。これらを基本目標として中期目標、中期計

画を作成しています。根底に流れるものは、自ら困難な課題に果敢に挑戦する「進取の精神」を有する人材育成ならびに「進取の気風」にあふれる総合大学にふさわしい大学改革の実施です。

運営費交付金削減による教育・研究の質の低下を防ぐために

中島 国立大学における運営の基盤的な予算となる運営費交付金は平成16年度の法人化以降、この11年間で

大幅に縮小される状況が続いており、教育や研究の質的低下が懸念される状況にあります。

前田 限られた財源の中で大学を運営していたためには、国立大学がそれぞれの強みや特色を最大限に生かし、自ら改善・発展する仕組みを構築する必要があります。また、経費の節減や効率化、学内資源の再配分や多様な財源の受け入れ、また本学独自の「鹿大『進取の精神』支援基金」の創設なども進めているところです。

中島 予算状況がきびしくなる中で、限られた予算をどのように有効に活用していくべきか、伊牟田会長のお考えをお聞かせください。

伊牟田 1つは改革です。徹底的な見直しによって無駄な経費の削減と効率化について模索し、改革していく必要がある。そして2つ目は、稼ぐ力。地域性を生かした魅力ある大学づくりをすることによって学生を増やすこと。大学病院の稼ぐ力も大事です。将来的にはインキュベーションの投資によって得られたものを売却するとか上場に向けて収益事業を図るとか。そういったことにつながる研究開発を進めていく必要があると思います。そして最後に支援

です。多様化した支援金をどのように集めていくかということも問われていくと思います。

地場産業と地元国立大学のかかわり

中島 次に、地域社会、とりわけ地場産業と地元国立大学の関わりについてお話を伺いたいと思います。人口減少



が進む中、大学として魅力を高め、競争力をつけるための取り組みについて、企業経営者として伊牟田会長はどのようにお考えでしょうか？

伊牟田 統計によると、鹿児島県の人口がいま170万人ですが30年後には130万人になり、40万人減ると言われています。(国民)1人が消費する金額は年間120万円から125万円と総務省が出しています。が、単純計算すると30年後は現在の水準から5000億円くらい消費が減るわけです。

このように人口と消費が減ることと考えると、今後、交流人口をいかに増やすかということが大きな課題ではないかと思えます。鹿児島県の地域に魅力があれば、県外、外国からお客様が来る、あるいは県外からの学生や留学生も増えると思えます。交流人口を増やすには、ビジネスもそうですが、観光がポイントになる。農林水産業と組み合わせる、あるいは医療と組み合わせる医療ツーリズムもあります。そのあたりが鹿児島の特色だと思えますので、そういうところの産官学民連携を生かした地域づくりに鹿児島大学がどのように貢献していくかというところが大きな課題ではないかと思えます。

中島 地域として交流人口の増加を図るべきというお話ですが、その点に関して、大学としてはどのように対応できるとお考えでしょうか？

前田 鹿児島県は南北600kmと広い地域にわたっていますので、まず地域の特色を生かした人づくりが大切だと思います。その地域で盛んな産業を支える人材を育てることです。それから、いま伊牟田会長のお話にあったように、外国からの来県者を増やすということも1つの方法でしょう。そのために大学としては、グローバルな視点を持った学生を育てることが非常に大切だと思います。

第3は大学の持っている研究のシーズをできるだけ地場産業に生かしていくということ。地域ニーズに応じた社会人や地域連携の推進も必要です。現在、鹿児島大学ではかごしまルネッサンスアカデミーで、社会人向けの授業を行っており、「焼酎マイスター養成コース」のほか、「林業生産専門技術者養成プログラム」、「稲盛経営哲学プログラム」といった地域に根ざした社会人教育、リカレント教育を行っています。これからもそういう面を大いに進める必要があると思っています。研究面では、島嶼がますます脚光



を浴びる時代です。島嶼に関わる自然の研究、生物多様性の研究を盛んに行い、鹿児島という地域についても高い学術的価値を持たせる必要があるかと思っています。また地域に昔からある風土病やウイルス病の研究など医療面においても鹿児島大学は国際的に高く評価されていますので、そういう研究もこれから推し進めていく必要があるかと思っています。

イノベーション創出と 国立大学の役割

中島 諸外国では、イノベーション創出における大学の重要性が認識されてきて、国際競争力の強化のため

前田芳實 (まえだ・よしざね)
鹿児島大学長

昭和44年3月鹿児島大学大学院農学研究科修了(昭和52年3月 農学博士取得(九州大学))。同年3月 鹿児島大学助手農学部。昭和53年9月 アメリカ合衆国ジョージア大学 Research Associate(昭和54年9月)。昭和56年10月鹿児島大学助教授農学部。平成6年7月鹿児島大学教授農学部(平成21年3月)。平成10年6月アメリカ合衆国ミシガン州立大学 Visiting Professor(平成10年11月)。平成18年4月鹿児島大学農学部長(平成21年3月)。平成18年4月国立大学法人鹿児島大学教育研究評議会評議員。平成21年4月国立大学法人鹿児島大学理事(平成25年3月)。平成25年4月国立大学法人鹿児島大学長(現在)

にも積極的に取り組んでいると言われています。イノベーション創出のためには、優秀な人材の育成が欠かせませんが、そこにも大学の役割が大きいのではないかと思えます。

前田 イノベーション創出に向けて学内でも改革を進めています。理工学研究科では、大学院の改組を行い、新しい教育体系を作っています。農

学部でも従来と違う形の教育体系を整え、改革を進めています。

また、地域の課題を解決するため、大学全体として、共通教育から卒業までに、地域貢献マインド、すなわち地域に貢献する姿勢を持った人材を育成するための教育プログラムを進めつつありますので、地域に大いに貢献する学生がこれまで以上に増えてくることを期待しています。

伊牟田 地域に貢献できる人材を育てるといことは大事だと思っています。ただ、人口減少、運営費交付金の減少など、いま地方はどこもきびしい環境ですので、地方大学は競争の時代に入ってくると思います。

ですから、いかに個性化するかがポイントではないかと思っています。鹿児島は景観や歴史・文化、温泉等、観光面でも非常に資源が豊富です。食については農業・畜産業・漁業ともトップクラスで品質が高いし、大学の医療水準も高い。こういうところを融合して、産官学民で連携しながらいかに特色のある大学を作るか、いかに地域に貢献できる人材を育てるか、それが鹿児島大学にとって一番重要ではないかと思っています。

前田 鹿児島大学では、島嶼、環境食と健康、それから水とエネルギー

という全学横断の相互研究を行っている、いずれも観光ともつながるようなテーマでもあります。とくに農学部、水産学部、共同獣医学部という食料の生産に密接に関わる分野が、他大学に比べ随分層が厚いと言えます。全国でもトップクラスの質の良い食料品を生産している県ですので、食料という観点から本学は新しいイノベーションを創出することができるとは思っています。

伊牟田 農業、農生産品には非常に競争力がありますから、素材を輸出するだけではなく、付加価値をつけて製品化する、6次産業化して価値を高めて販売するなど鹿児島大学としての総合力を集約すれば、いい循環が生まれるでしょうね。

グローバル企業が大学に求める人材像と大学の取り組み

中島 企業経営者として鹿児島大学にはどのような人材を育ててもらいたいとお考えでしょうか。

伊牟田 まずは地域のことをよく知ること。鹿児島にはたくさん魅力があるのに、意外と知らない

という学生もいます。日本人学生だけでなく留学生も含めて、鹿児島がきわめて大事じゃないでしょうか。そういうバックグラウンドの上に立つてインターナショナルで通用する人材を育てるといことです。私の経験からも自分のエリア、地場のことをよく知って、それをアピールできないと外国人には評価されません。特に地域的にも鹿児島は中国、台湾、香港等、東南アジアが一番近いところなので、ローカルを知ってグローバルな行動ができる人材が今後非常に重要になると思います。

前田 いま伊牟田会長がお話しされたことは、地域のことをまずしっかりと学ぶということ、さらにそれをグローバル

ルに展開できるという2つの面を備えた学生が必要だということですね。たしかにその通りだと思っています。

鹿児島大学では、グローバル社会を牽引する学生の育成についても、いろいろなプログラムが用意されています。大学の国際開放度を高めるための独自の質の高いグローバル教育です。具体的な例としては海外研修です。昨年は28のプログラムがあり、さまざまなテーマのもと

伊牟田均 (いむた・ひとし)
鹿児島大学経営協議会外部委員
城山観光株式会社取締役会長
昭和45年鹿児島大学法文学部経済学科卒業。同年野村證券入社。本社国際金融部長、ノムラ・シソバール取締役社長、日本合同ファイナンス(現・ジャフコ)専務取締役、野村・中国投資副社長などを経て平成20年6月城山観光代表取締役副社長。平成21年4月城山観光代表取締役社長。平成27年6月より現職



5名〜20名程度の学生がグループで世界各地に出かけます。

学生たちは、短期間ですが濃密な実習を行うことよって、現地の実情や課題、魅力を知るだけでなく、日本の素晴らしさ、あるいは日本についていかに知らないかということを知るきっかけになっています。研修の後は、語学や地域文化を勉強するなど、学生の姿勢に大きな変化が現れています。本学としては、こういう展開をこれから一層進めていきたいと思っています。

伊牟田 28ものプログラムがあるんですか。年間何名くらいが海外に？

前田 学生は250名くらいで、教員が引率して行きます。学生に対し



ては大学から旅費の補助が支給されています。期間は短いもので1週間から10日。だいたい夏休み、あるいは冬休みの期間に実施しています。

引率の先生には熱心な先生が多くて、学長としても大変助かっています。

大学院の国際化については、一例として熱帯水産学国際連携プログラムがあります。本学の水産学部が基幹校となり、フィリピン、タイ、インドネシア、マレーシアの水産系の学校と連携し、新しい教育を始めています。

さらに平成28年度からは、**国際バカロレア**の教育を受けた受験生を募集する予定です。多様な学生を受け入れるという点でも大学として非常に期待しています。

※国際バカロレア 国際的な大学入学資格「国際バカロレア資格」取得者を対象にした入試



熱帯水産学国際連携プログラムの様子

コミュニティを支える人材を育てる

中島 地域貢献への取り組みとともにコミュニティを支える人材を育成することが大学として今後一層求められるのではないかと思います。全国比でも急速に少子高齢化、過疎化が進んでいる鹿児島県、社会にとつて、今後どのような人材が必要か、伊牟田会長のお考えをお聞かせください。

伊牟田 まずは学生諸君が地域に入つてコミュニケーションを図り、何が問題かを見つけ、それをどう解決していくか考えるということが今後さらに重要になってくるでしょう。

中島 コミュニティに入り、その一員となつて考えるということですね。

伊牟田 ええ。そこが大事ではないでしょうか。そうすることで、若い学生のいろいろなアイデアが出てくると思うんです。地域と交わると同時に観光関係の会社・業界、あるいは農林水産物の加工会社など、地域のビジネスとも交流していく。そういうところから新しいヒントが出てくるのではないかと思います。

前田 地域の中に入っていくという現場体験には非常に大きな意義がありますね。地域では、空き家、廃校、過疎化などいろんな問題がありますよね。そういう社会的な問題、あるいは6次産業化への取り組みなどは、鹿児島大学が今から実施しようとしている地域マイノリティの教育プログラムと密接に連携することですので、それぞれの担当の先生と検討していきたいと思っています。

伊牟田 そうすれば、鹿児島大学はもつと地域の頼りになつて、みんなのサポートを受け、勝ち残る地方大学になつていくのではないかと思います。地域の強み、特性もあるし、地理的に東南アジアなど南の国々にも開けていますから、最高の大学だと思います。

前田 鹿児島大学の卒業生の約4割が鹿児島県内に就職していますが、将来的にはこれをもつと増やす必要があると思っています。そのためには、商工会議所をはじめとする各種経済団体と卒業生の出会いの機会を密にする必要があります。いままでそこが希薄で、われわれとしても努力不足だったと思いますので、今後、キャリア形成や就職支援の面でご教示いただきたいです。

伊牟田 それは大事ですね。これからの日本は、海外からの観光客、ビジネスマン、留学生に期待するところが増えると思うんです。そういう人たちに鹿児島のことを理解してもらい、体験してもらう取り組みが大事だと思います。

私は最近、留学生にレクチャーを始めました。城山観光ホテルに来てもらい講演し、鹿児島地域のことや観光のことなどを勉強してもらって鹿児島の良いことを知ってもらおう。将来、鹿児島や九州に就職するかもしれないし、母国に帰っても、鹿児島のことを口コミで広げてくれると思うんです。ですから地域、会社と留学生との交流も今後トレンドとして大事だと思います。

前田 留学生を地元に残してほしいという声は、鹿児島県工業倶楽部の会合や商工会議所の方々からもよく聞きます。大学としても、留学生が地元に残れるように努力していきたいと思っています。経済界の方々も留学生を鹿児島に残すのはいいことだというPRをしていただけたらと思います。

中島 いま鹿児島大学に来ている留学生は約280人で、そのうちおよそ8割はアジア地域からの留学生です。こ

の留学生は、鹿児島大学だけでなく鹿児島という地域にとっても大きな財産になる可能性がありますね。

伊牟田 城山観光ホテルでは中国、台湾、韓国を中心に10人の外国人が働いています。ビジネス、観光で来られる外国の方も増えていきますから、そうしたお客様をサポートするのに非常に大事な人材です。観光業に限らず農林水産業でもそのようなになっていくと思います。



現場体験と基礎力を積み重ね、世界へ打って出る気概を！

中島 最後になりましたが、鹿児島大学の先輩として、後輩へ向けてのメッセージをお願いします。

伊牟田 今の学生達は少子化のため過保護に育っていると感じていますが、今日のお話では28の海外研修プログラムがあり、多くの学生が外へ出ていくことでした。やはり地元のことをよく勉強して、世界へ出ていこう、やってやろう、という気概を持った学生であってほしいと思います。

それから、僕らの時の経済学はマルクス経済学でしたが、やはりマルクスやケインズの経済学とか、アダム・スミスの本を読むとか、ベースとして古典的な勉強も必要です。その上で地域のこと勉強して、グローバルに外へ出ていくということ。それが、ひいては鹿児島、九州という地域に貢献する。そういった学生になってほしいし、大学になってほしいと思います。

中島 前田学長も鹿児島大学出身ということ、後輩へ向けてのメッセージをお願いします。

前田 私は、若い時に現場体験をするのが非常に大切だと思っています。自分のことを言って恐縮ですけれども私は農業のことを何も知らずに農学部に入学したことが、大きなコンプレックスでした。それで1年の夏休みに自分で実習先を探し、徳之島のサトウキビ農場に実習に行った経験があります。それは今でも非常に良い経験として残っています。ですから、学生にはなんでもいいから現場を体験してほしいという思いが強いんです。理論も必要ですけど、まずは現場を知ってはじめて理論が生きてくる。自分の体験からそういう思いがあります。

中島 本日は大変貴重なお話をありがとうございました。



進行
中島大輔
(なかじま・だいすけ)
鹿児島大学 学長補佐 (広報担当)